

## 第1回 マルクス・エンゲルスの後進国革命論の変遷

by 森田成也 2017.7.21@文京区民センター

(以下の論考は、2017年7月21日に行なった講義に筆者自身が加筆修正したものです。)

### はじめに——2つの基軸

本日から4回にわたって「永続革命としてのロシア革命——マルクス・エンゲルスからトロツキー・グラムシまで」というテーマで連続講座を行ないます。

今年はロシア革命100年であり、さまざまな切り口からロシア革命を論ずることができると思います。ロシア革命そのもののロシア史上の意義であるとか、今日におけるその教訓であるとか、あるいは世界史におけるロシア革命の位置づけなど、いろいろな角度から検討できると思います。そうした中で今回の講座は、より理論的にロシア革命の問題にアプローチしたい。マルクスとエンゲルスから始まって、プレハーノフやレーニンやトロツキーなどのロシア・マルクス主義者を経て、グラムシに至るまで、彼らによってロシア革命ないし後進国革命というものがどのように理解され、解釈され、概念化されていったのか、そういう切り口からじっくりと分析していきたいというのが本講座の目的です。

今回の講座では4回設定しましたが、もともと朝日カルチャーセンターでロシア革命100周年ということで「マルクスとロシア革命」というテーマで同じく4回の講座を行ないました。その経験を踏まえつつも、その後さらに自分なりの研究が進みましましたので、その点も含めてお話したいと思います。とくに、この講座にお集まりの方は、ロシア革命やレーニンやトロツキーについてそれなりの基礎的事実をすでに知っていると思いますので、あまり初歩的な説明をすることなく、踏み込んだ議論をしていきたいと思います。

まずマルクスとエンゲルスからお話が始まりますが、一口にマルクス・エンゲルスとロシア革命との関係と言っても、2つの論点、2つの基軸がそこには絡み合っています。そこで最初に大きく議論の流れを2つに分けて、それぞれ1回ずつこの講座を当てたいと思います。

まず第1の基軸は、マルクス・エンゲルスの後進国革命論、もっと限定すれば、ドイツ革命論です。実を言いますと、ロシア革命を担ったロシアのマルクス主義者たちは、マルクス・エンゲルスのロシア革命論から直接影響を受けていたわけではありません。ロシア・マルクス主義の父と言われるプレハーノフは何よりも『共産党宣言』におけるマルクスのドイツ革命論に依拠してロシア革命の展望を描きましたし、そこから生まれたメンシェヴィキもボリシェヴィキも、そしてトロツキー自身もそうですが、マルクスのロシア革命論に依拠したわけではなくて、基本的にはドイツ革命論に依拠したわけです。

マルクス・エンゲルスがロシア革命について何を言っていたか、『マルクス・エンゲルス全集』を全部ひっくり返して調べたとしても、1905年や1917年に実際に起こったロシア革命に直接つながる話はあまり出てきませんし、次の講座でより具体的に明らかにしますが、ロシア革命の具体的な展望についてもほとんど彼らは論じていません。自分たちがよく知らない国のことについては、彼らのような天才をもってしても、具体的に語れることはごくわずかであり、そして実際に語ったことはほとんどロシアのマルクス主義者には役立ちませんでした。ロシア・マルクス主義者はむしろ、マルクス・エンゲルスのより具体的で現実的なドイツ革命論に基づいたのであり、それをロシアに（修正のうえ）適用したのです。これは基本的に正しかったと思います。

第2の基軸が、では実際にマルクスとエンゲルスがどのようにロシアをイメージし、そこでの革命や未来社会の展望をどのようにイメージしていたのか、その変遷についてです。朝日カルチャーセンターでの講座では、この2つの基軸を1回で話そうとしたのですが、とうてい無理でした。そこで、今回の講座では、最初からこの2つを2回に分けてお話しすることにします。今日は第1の基軸についてのみお話し、次回にマルクスとエンゲルスのロシア像、ロシア革命像の変遷についてお話しします。

ちなみに、この問題をめぐっては、さらに、マルクス、エンゲルスの農民論という基軸も設定することができ、この問題における両名の認識の変遷を追うことも有意義なのですが、それだとさすがに入り口の議論だけで3回分の講座を取ってしまうので、2つの基軸に限定させていただきます。

## 1、革命論の弁証法的発展モデル

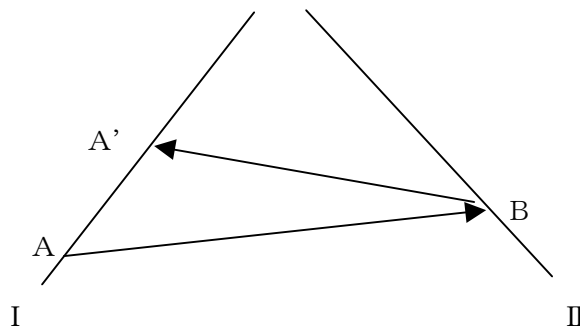
マルクス・エンゲルスの後進国革命論、とりわけドイツ革命論は両者が現実から学びつつ形成されていったものです。アприオリに構想した理論をあてはめたのではなく、常に生きた現実と実際に起こった事態と向き合い、それらを分析し、そこから帰納的に結論を導き出してきたわけです。当然、この変遷は、マルクス・エンゲルスが経験したドイツやヨーロッパの歴史、彼らが生きた時代——当時はさまざまな戦争と革命の時代でもありました——の経験、そういったものの影響を受けています。ある時期のマルクス・エンゲルスの発言だけを引用して、これがマルクス・エンゲルスの後進国革命論ですとは簡単には言えないわけです。

そこで、あらかじめ、マルクスとエンゲルスの後進国革命論の変遷をある程度立体的に理解できるよう、そもそも理論（革命論も含め）というのはどのように発展していくのか、その簡単なモデルを提示しておきたいと思います。

### 理論の発展モデル

私は『ラディカルに学ぶ資本論』（柘植書房新社、2016年）の中で資本の蓄積体制の変遷を表現するのに、内側に傾く2本の線とそのあいだのジグザグというモデル図を提示したのですが、今回はこれを理論の発展過程に応用しました。正しい理論というのは、ある一定の箇所にある「点」という形では存在しません。ヘーゲルは真理というのは「過程」と考えていて、最終的な真理に至る過程全体が真理を構成する不可欠な「契機」と考えていました。最終的な真理を命題形式で言えばごく単純なものになってしまいます（たとえば、キリスト教徒にとっての「神は絶対的存在である」のように）。ヘーゲルはそれを直接提示してもだめであり、それに至るまでの全過程、最も単純で抽象的な命題から始まって、その一面性を明らかにして、しだいにより高次で具体的で複雑なものに至る過程、こうした過程の全体が真理なのであると考えたわけです。このような真理観をマルクスも受け継いでいますし、『資本論』はその代表的事例です。この複雑な過程を最も簡潔に表現したものが、有名な「否定の否定」という図式なのですが、「否定の否定」というだけではあまりにも単純すぎますし、一般に評判もあまりよろしくない。

そこで私は、内側に傾いた2本の直線とそのあいだのジグザグとして理論の発展をとらえ、このジグザグの過程全体が真理を構成するものとしてモデル化したいと思います。これによって、「否定の否定」という単純な図式をより立体的にとらえることができるようになります。



上の図にあるように、上に行くほど内側に傾いていく2本の直線を書き、この2本の直線のどちらかの地点から始まって、他方の直線へ行ったり来たりしつつ、しだいに上に登っていくものとして、理論は発展していくと想定するわけです。ただし直線だと最終的に1点に収斂してしまうので、無限に接近するがけっして交わらない双曲線の方がより正確なのですが、ここでは便宜上、内側に傾いた2本の直線をモデルに使いましょう。

「2つの」線を設定しているわけですから、主要な対立軸をなす2つの基本的観点が存在するということを想定しています。そしてそれが「点」ではなく、上に伸びた「線」であることは、それが時とともにより高度化し、複雑化していくことを表現しています。そしてどちらの線も内側に、すなわち相手側に傾いているのは、両観点は対立しているのだが、その発展の中でしだいに反対側に接近していき、相手側の要素をしだいに自己のうちに取り込んでいくということを表現しています。より高度になるということは、対立物を自己のうちに含み込んでいく過程でもあるということです。逆に言う

と、下に行けばいくほど極端で単純化された一面的観点になる（どちらの観点に立つとしても）、ということになります。

さて、この2本の直線のあいだのジグザグとして理論というのは発展していくわけですから、どちらの線から始まってもかまいません。たとえば左の直線をⅠ、右の直線をⅡとするなら、Ⅰから始まってⅡに移り、次に再びⅠ線上のより高い地点に移るといのように発展してもいいし、逆に、直線Ⅱ上から始まって、Ⅰの直線に移って、再びⅡに戻ってもよい。直線Ⅰ上にある理論をAとし、直線Ⅱ上にある理論をBとするなら、最初はAから始まって、Bに移り、次により高度なA'に移ってもいいし、Bから始まって、Aに移り、より高度なB'に移ってもいいわけです。最初の場合は、 $A-B-A'$ という定式になり、後者の場合は、 $B-A-B'$ になります。このように、どちらから始まってもかまわないのですが、同じ線上にあるより高い地点に移ろうと思えば、いったん相手側の直線に移行する必要があります。もちろん、ある程度なら同じ直線上を上がることはできますが、それには限界があります。はしごを上ることを考えていただければわかるように、まず左に足をかけて、次に右に足をかければ、今度は左足をより高い所にかけることができます。右に足をかけることなく、左足だけを徐々により高い所にもっていくことは不可能ではありませんが、限界があります。いったん、右に足をかけてこそ、左足をより高い所にもっていくことができるのです。それと同じで、理論というのも、たとえば最終地点の理論が、この対立項の1つの線上にある理論であるとしても、そこに至るまでに、いったん逆側に移動する必要があり、次にこちら側に再移動して理論が発展していくわけです。これを非立体的に図式化すると「否定の否定」になります。

もちろん、この過程は1回の「否定の否定」で終わる必要もなく、さらに上に向けてジグザグを繰り返すことができます。たとえば、 $A-B-A'$ からさらに $B'-A''$ というように発展していくことができるでしょう。しかし上に行けばいくほど、ジグザグの歩幅は短くなり、上がる高さも短くなります。最終的には、高さも対立する線との幅もほとんどなくなって、線と線とのあいだの絶えざる振動という定常状態に至ります。真理はどこまで行っても安定した一点に至ることはないわけです。

さて、このようなモデル化に即しますと、ある真理というのは、例えば、この2つの傾いた直線上のどこかある一点を到達点として指し示して、これがその真理ですと言っても、実際にはその真理の全体を明らかにしたことはないんですね。ある点から始まり、次に対立する直線上に移って、次にこちらの線上に戻ってくる、こういう流れを示すことによって、初めて真理を示すことができるのです。つまり、真理というのは、この点やあの点ではなくて、この点やあの点にいたる過程そのものということです。そういう意味では、この到達点に至る諸点というのは、それ自体としては誤っているけれども、到達点に至るための必要不可欠な媒介項としての「正しさ」を持っているということになります。この場合、「間違っているけれど正しい」という一見すると矛盾した言い方が成り立つわけです。

弁証法の教科書で言う「対立物の統一」というのも、実はこのようなジグザグの過程を静態的に表現したものです。「統一」と言うと、非常に静的に聞こえますが、そうではなくて、こういうジグザグの過程を経過していく動的な流れを「統一」と表現しているわけです。

### 革命論における2本線モデル

では後進国革命論においては、どのような2本線を設定できるでしょうか。何が本質的な対立軸をなしているのかは独自の分析課題ですから、この2本線を正しく設定しないと、正しいジグザグも描けません。ロシア革命を永続革命として解明しようとしているわけですから、革命論における二つの対立軸はある程度予想できます。それは、段階革命論と複合革命論という対立軸であり、前者を直線Ⅰに配置し、後者を直線Ⅱに配置しましょう。同じ段階革命論や複合革命論でも、最も単純なものからより複雑でより高度なものまで想定することができ、上に行けばいくほど内側に傾いていき、対立項のほうに近づくわけです。もし近づかないとすれば、垂直の線になります。しかし直線は傾いていますから、高度化することは必然的に対立項の要素をある程度取り入れることになるわけです。取り入れているけれども、より優位な要素はやはりこちらの直線上の要素です。

たとえば、複合革命論の最も単純なバージョンとしては、ブルジョア民主主義革命と社会主義革命とを区別することなく、半封建社会から一気に社会主義社会をめざす理論として想定することができます。この理論は直線Ⅱのぐっと下の方に位置します。他方、複合革命論の最も高度な理論としては、トロツキーの永続革命論を想定することができます。これは同じ直線Ⅱ上にあるとしても、ずっと上の方に位置します。後者の理論はすでに、2つの革命の相違と区別や社会の一定の資本主義化というものを当然の前提にしているわけですが、優位であるのは、複合革命論の要素です。だからそれは複合革命論の線上に位置するわけです。このように2つの理論は同じ線上に属するとしても、ま

まったく違う位置にあるわけです。しかし、両者のあいだにある高さや傾きの相違を無視して、どちらも同じⅡの線上に存在するという理由で両者をいっしょくたにするとすれば、それはまったく誤りであることがわかります。しかしそれこそ、永続革命論に対するスターリニストの典型的な非難であったわけです。

## 2、ドイツ革命論の最初の出発点

さて、このように、段階革命論と複合革命論という2本の直線を想定し、両者が相互に接近しながら高度化していくと考えるなら、マルクスとエンゲルスの後進国革命論がどのように発展していったかをかなり明瞭に描き出すことができます。

### マルクスの「ヘーゲル法哲学批判序説」

まずマルクスのドイツ革命論の最初の出発点がどこにあったかを確認する必要があります。最初にマルクスがドイツ革命について述べた有名な文章は、「ヘーゲル法哲学批判序説」（1843年末～1844年1月）に見ることができます。この論文は、『独仏年誌』というマルクス、エンゲルスをはじめとする青年ヘーゲル左派の人たちが共同して出した雑誌に掲載されたもので、これにマルクスは、「ユダヤ人問題」と並んでこの「ヘーゲル法哲学批判序説」を寄稿しました。ちなみにエンゲルスは、「国民経済学批判大綱」という有名な論文を寄稿し、マルクスに経済学への強い関心を抱かせる上で大きな役割を果たしました。

さて、ここで展開されたドイツ革命論というのは、どういうレベルに位置するものだったのでしょうか？ これは、基本的には複合発展論の線上のかなり底辺に近いところに位置するものでした。マルクスは次のように言っています。ちょっと長くなりますが引用しておきます。なお、末尾の(1:)というのは、邦訳の『マルクス・エンゲルス全集』第1巻という意味で、その後続く数字はその巻の頁数です。

フランスやイギリスでは、行き着くところまで行った独占を止揚することが問題であるのに、ドイツでは独占が行き着くところまで行き着くことが問題である。あちらでは解決が問題であり、こちらではやっとはじめて衝突が問題である。(1: 419)

しかし、ドイツの根源的(ラディカル)な革命の前に一つの重大な困難が立ちはだかっているように思われる。すなわち、およそ革命には受動的な要素が、物質的な基礎が必要なのである。理論はつねに、それが国民の欲求の実現である場合にだけ、その国民のうちに実現される。……

だがドイツは、政治的解放の中間段階を、近代諸国民と同時にほじのぼらなかつた。ドイツは、理論的に克服した段階にさえ実践上ではまだ到達していない。どのようにして、ドイツは命がけの飛躍によって自分自身の障壁を飛び越えるだけでなしに、同時に近代諸国の障壁をも、すなわちドイツが実際には自分の現実の障壁からの解放として感じ求めざるをえない障壁をも飛び越えることができるだろうか？ ラディカルな革命はラディカルな欲求の革命でしかありえないが、その欲求の前提と温床とがまさに欠けているように思われる。(1: 423)

ドイツは、政治的現代の欠陥が一個独特の世界にまで形成されたものとして、政治的現代の一般的障壁を打ち倒さないでは、ドイツの特殊な障壁を打ち倒すことはできないだろう。ドイツにとっては、根源的(ラディカル)な革命が、普遍的人間的な解放が空想的な夢想なのではなく、むしろ部分的な、単に政治的な革命、家の柱に手をつけない革命が夢想なのである。(1: 424-425)

市民社会のどの階層も、勝利を祝わないうちに敗北をなめ、立ちはだかる障壁を克服しないうちに自分の障壁を張りめぐらし、度量を發揮できないうちに狭量を發揮し、……どの階級も、自分より上層の階級との闘争を始めるやいなや、自分より下層の階級との闘争に巻き込まれてしまう。こんなわけで、諸侯が国王と、官僚が貴族と、ブルジョアがこれらすべてと闘争している間に、もう他方では、プロレタリアがブルジョアに対する闘争を始めているありさまである。(1: 426)

それではドイツの解放の積極的な可能性はどこにあるのか？

解答。それは根源的(ラディカル)な鎖につながれた一つの階級の形成のうちにある。市民社会のどんな階級でもないような市民社会の一階級、あらゆる身分の解消であるような一身分、その普遍的苦悩のゆえに普遍的性格をもち、なにか特殊な不正ではなしに不正そのものをこうむっているために

どんな特殊な権利をも要求しない一領域、もはや歴史的な権原ではなくただ人間的な権原だけをよりどころにすることができる一領域、ドイツの国家制度の帰結に一面的に対立するのではなくその前提に全面的に対立する一領域、そして結局、社会のあらゆる領域から自分を解放し、それを通じて社会の他のあらゆる領域を解放することなしには、自分を解放することのできない一領域、ひとことでいえば、人間の完全な喪失であり、したがってただ人間の完全な回復によってだけ自分自身をかちとることのできる領域、こういった一つの領域の形成のうちにあるのである。社会のこうした解消をある特殊な身分として体現したもの、それがプロレタリアートである。(1: 427)

結論を要約しよう。ドイツの實際上可能なただ一つの解放は、人間を人間にとっての最高存在であると言明するようなこうした理論の立場に立つてする解放である。ドイツでは、中世からの解放は、中世の部分的克服からの解放でもあるものとしてだけ可能である。ドイツでは、あらゆる種類の隷属をうちやぶることなしにはどんな種類の隷属をも打ち破ることができない。根本的なドイツは、根本から革命することなしには、どんな革命も行なうことはできない。(1: 428)

つまり、お隣のイギリスやフランスではすでに資本主義が高度に発達し、すでにこの資本主義を止揚しようとする社会主義的な運動が起こっている。イギリスでは革命的チャーチストの運動がそうですし、フランスではさまざまな社会主義者や共産主義者が登場し、資本主義の克服を呼びかけていた。ところがドイツではまだ旧態依然たる絶対主義君主制であり、半中世的な独裁体制の下にあって、しかしその下でもすでに資本主義の輸入が始まっている。旧体制を覆さないうちに、すでに新しい資本主義的搾取の悲惨さも生じている、このようにマルクスは見ています。このような状況は、後にトロツキーが不均等複合発展と称するものの典型的な現れであり、それが当時のドイツの状況だったわけです。

そして、こうした旧体制に挑戦すべきドイツ・ブルジョアジーは、「自分より上層の階級との闘争を始めるやいなや、自分より下層の階級との闘争に巻き込まれてしまう」がゆえに、「解放の思想をあえてつかみとろうと」しないという臆病さを持っていました。当時におけるドイツの左派インテルゲンツィアたちは、マルクスに限らず、こうした状況を「ドイツのみじめさ」と規定し、ドイツ・ブルジョアジーの臆病さを嘆いていたのです。たとえばマルクスの友人であった青年ヘーゲル左派のモーゼス・ヘスなどもそうです。ドイツはみじめだと、隣のフランス、イギリスは絶対王政を倒して、革命を起こして、とくに隣のフランスは共和制を作った。自由、平等、友愛の体制を作ったというのに、ドイツではまったくもって封建的中世的な体制が続いており、それを打破すべきブルジョアジーはそれに甘んじている。なんと惨めで悲惨な状態だ。こういう問題意識の中で、知識人たちはドイツ的状况に対する憤りと不満から、非常に急進化していきます。これらの急進化した青年の中にマルクスとエンゲルスもいたわけです。

ではこういうドイツ的惨めさに対して、どうすればいいのか？ ドイツはすでに、絶対主義王政を覆す前に資本主義的悲惨さをこうむっているのだから、今さら 1789～93 年にかけてのフランス大革命のようなことをやることはできない。ドイツにおける革命は、「政治的現代の一般的障壁を打ち倒さないでは、ドイツの特殊な障壁を打ち倒すことはできない」のであり、単に政治的解放をめざすのではなく、「普遍的人間的な解放」をもめざさないと、政治的解放さえも空想になるのだと。つまり、単に政治的な抑圧だけでなく、社会的な抑圧、あらゆる隷属、あらゆる搾取というものを覆すような「根源的(ラディカル)な革命」をしないかぎり、フランスが実現したような政治的な変革もできないという議論をマルクスは立てました。

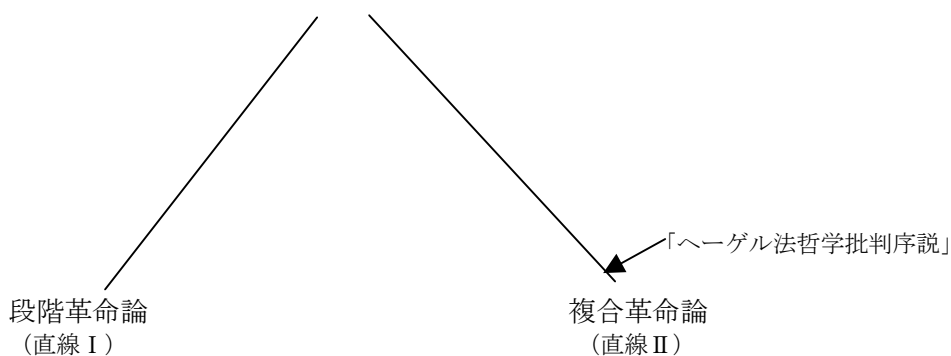
### 利益の普遍性ではなく苦悩の普遍性

では、そんな一挙的解放をどの階級が担うのか？ すでに述べたように、ドイツ・ブルジョアジーは、臆病でみじめで、君主制と闘う以前に、すでにプロレタリアートの脅威を下から受けていました。こうした議論は、後のトロツキーのロシア・ブルジョアジー論とよく似ており、後進国ドイツの複合発展の見地から言われています。では、どの階級が担うのか？ マルクスは、プロレタリアートが担うと言っています。なぜプロレタリアートなのか？ なぜなら、プロレタリアートこそが、このドイツ社会において、単に政治的な抑圧だけでなく、あらゆる抑圧と搾取をこうむっているからであり、したがってそれがこうむっている抑圧や不正は特殊なものではなく、普遍的で全人類的な性格を持っている。だから、プロレタリアートが自己の抑圧を覆そうとする革命は、普遍的人間的な性格を持たざるをえない、というわけです。フォイエルバッハの影響を感じさせる論理です。

このような議論は実は、フランス革命を推進したブルジョアジーが有していた「階級的利益の普遍性」のいわばネガなんですね。フランスにおいて、なぜブルジョアジーが国民を団結させ国民の先頭

に立つことができたかという、このときのブルジョアジーの階級的利益というものが、国民全体の利益となるような普遍性を持っていたからであり、だからこそブルジョアジーがフランス革命において国民的指導勢力になったわけです。しかしドイツにはそういう階級が存在しない。ブルジョアジーはすでにプロレタリアートと対立しているので、自己の階級的利益を全国民的利益とすることができない。しかし、その代わり、「自己の階級的利益」ではなく「自己の階級的苦悩」を普遍的なものとする階級がいる。それがプロレタリアートだ、というわけです。フランスのようなポジとしての普遍的階級がないかわりに、ネガとしての普遍性を語る階級がいる。つまり、その階級の苦悩があらゆる国民の苦悩であるような、したがってそれを打破することがあらゆる抑圧と不正を打破することにつながるような、そういう階級がいるじゃないか。それがプロレタリアートだ。だからプロレタリアートは一挙的に政治的かつ社会的な解放をやることができるし、やらなければならない、というわけです。

このように、プロレタリアートの階級的苦悩の普遍性というかなり哲学的な根拠に基づいて、一挙的解放を展望するわけですから、これは2つの直線のうち右側の直線Ⅱのかなり下のほうに属する議論と言っていいでしょう。このときのマルクスの議論を、永続革命論の一種とみなす見方が一部に見られますが（たとえばミシェル・レヴィの『若きマルクスの革命理論』や淡路憲治氏の『マルクスの後進国革命像』など）、これは同じ直線上に属しているという面だけを見て、高さや傾きの重大な相違を見ないものです。



### シュレージエンの織工蜂起

この時点では哲学的で抽象的な議論でしたが、その直後に起きた1844年6月のシュレージエン（当時のプロイセン領、現在はポーランド領）で起きた織布工の蜂起は、マルクスによって1つの重要な現実的根拠になりました。そのことは、この蜂起の直後に書かれたマルクスの「批判的論評」（1844年7月）を読むとわかります。

マルクスはこう述べています。シュレージエンの蜂起は「プロレタリアートの本質の自覚から始まっている。行動そのものがこのようなすぐれた性格を帯びている。労働者の競争者である機械が打ちこわされただけではなく、財産の要求権を示す会計帳簿までも破り捨てられた。またその他の運動がすべてはじめは目に見える敵である工場主だけに向けられていたのに、この運動は同時に目に見えない敵である銀行家にも向けられている。最後に、イギリスの労働者蜂起には、どれ一つとして、これほど勇敢に、慎重に、ねばりづよく行なわれたものはない」（1:441）。

この「批判的論評」はあまり注目されていませんが、マルクスの思考過程を理解する上で非常に重要なものです。この織工たちが狭い階層的利害にとどまらないより広い階級的要求を出したことに注目し、そこにドイツの社会的解放を担う可能性を見出しました。しかし、これは非常に重要な根拠ではありましたが、まだかなり観念的であり、一面的なものです。なぜならこの織工たちは、大規模工場に集中された機械制大工業のもとで働く集団的労働者ではなく、典型的には家内工業の手工業労働者だったからです。

このような手工業労働者にとっての最大の脅威は、機械制大工業ですから、マルクスがここで述べているように、織工たちは競争相手である機械を打ちこわしたわけです。それだけではなかったところをマルクスは褒めているのですが、しかし、彼ら自身は小規模でばらばらの手工業労働者でしかなく、一挙的な政治的・社会的解放を担うような階級ではありませんでした。そんな力量は、当時のプロレタリアートにはまったくありませんでした。この点は後にエンゲルスが批判的に総括することになります。

### 3、史的唯物論の確立と革命論の転換

このように、マルクスの後進国革命論の出発点は、直線Ⅱのかなり下のほうにありました。このままでは、たいしてこの直線上を上へ移動できません。いったん反対側に移動することによってしか、つまり直線Ⅰに足をかけることによってしか上へ上がれないわけです。そしてその過程こそがまさに、1844年から45年にかけて起こった、マルクスとエンゲルスにおける史的唯物論の確立です。

この要素はすでに1844年の論文「批判的論評」や、当時は発表されなかった有名な「経済学・哲学草稿」にも現われていますが、明確に史的唯物論の立場に立つようになるのは、エンゲルスと深い意見交換をしてからのことであり、基本的には1845年以降のことです。その画期となるのは、言うまでもなく、両者が分担して書いた長大な草稿『ドイツ・イデオロギー』です。

この史的唯物論の立場からすれば、「ヘーゲル法哲学批判序説」で述べられたような、プロレタリアートの苦悩は普遍的だからプロレタリアートが社会を一挙に解放するんだという理論は成り立ちませんし、また、シュレージエンの織工のような手工業労働者を変革主体に設定することも非現実的であることが明らかになります。実際に、ブルジョア社会の変革を担うような階級の形成は、資本主義がそれなりに発達し、機械制大工業が出現し、大工場に労働者が集中し、その中で労働者が結合され訓練され、そして階級意識を高めていって、それが主体とならなければならないはずで、それまでは当然、ブルジョアジーが本来の主役であって、絶対主義的農奴制的君主制を覆すのはブルジョアジーの歴史的使命である、ということになります。そしてドイツにおいてもそうであるはずで、マルクスとエンゲルスはいったん、この見解を取ることによって、直線Ⅰの方に足をかけなおします。

#### エンゲルスの「ドイツの現状」

そのことをはっきりと示しているのは、エンゲルスの「ドイツの現状」（1847年3～4月）です。しかし単純な段階革命論ではなく、直線Ⅰの少し上の方に位置します。ですから、単純にドイツはブルジョア革命に直面しているから、フランス革命のようにブルジョアジーが指導的役割を果たすという議論ではありません。エンゲルスはすでにマルクスと同じく、ドイツのブルジョアジーは臆病で、脆弱で、勇気と大胆さに欠けていることを認識しています。つまりマルクスが「ヘーゲル法哲学批判序説」で書いた認識を共有しています。というよりも、この認識こそが、青年ヘーゲル派の出発点と言ってもいいわけです。しかし、エンゲルスはそれでもなお、ドイツの新しい体制において支配権を握るのはドイツ・ブルジョアジーであると主張しているわけです。

エンゲルスは、この結論を引き出すに当たって、まずもってドイツにおけるその他の階級の現状について具体的に分析しています。まず、小市民、つまり都市小ブルジョアジーについてはこう述べています。

小市民は、貴族に対してさえ弱かった。ましてブルジョアジーに対しては、彼らはとうてい対抗することができない。小市民は、かつて歴史に介入したあらゆる階級のうちで、農民について最もみじめな階級である。（4：45）

次に農民についてはこう述べています。

農民は、小市民と同じようなふがない階級をかたちづくっている。とはいえ、小市民よりも大きな勇気をもっている点で、小市民よりましである。だが、そのかわりに、歴史的な動力にかけては、まったく無能力である。彼らは、農奴制の鎖から自分を解放することさえ、ブルジョアジーの保護を受けなければ成し遂げることができない。（4：46-47）

残るはいよいよ労働者階級です。これについてエンゲルスは次のように述べています。

ところで、無産階級、通称、労働者階級はどうか？ この階級についてはやがてもっと詳しく述べることになるだろう。さしあたっては、彼らの細分状態を指摘するだけでよい。作男、日雇い、手工業職人、工場労働者、ルンペン・プロレタリアートへのこの細分、それにともなって、少数の微弱な中心地にしか存在しない、人口の乏しい広大な地域への彼らの分散、このことだけでも、彼らが相互の利害の共通性をはっきりと理解し、互いに意志を疎通させ、一つの階級を結成することを不可能にしている。この細分と分散のために、彼らは、自分の当面の日常的利益に、つまり、よい仕事についてよい賃金をもらいたいという願いに限るほかなくなっている。ドイツの労働者大衆は、公共の

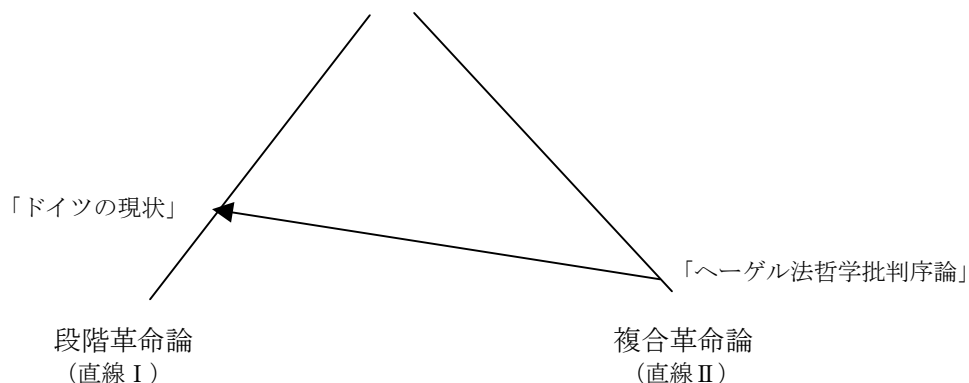
指導を引き受ける準備がまだほとんどできていない。(4:47)

このようにエンゲルスは、この時点でのドイツ・プロレタリアートは変革の指導的主体ではないと考えていました。当時の労働者階級の大半は手工業的であり、多様な階層に分断され、広範な地域に分散していたからです。このように、エンゲルスはドイツの現状を具体的に分析した上で、来たるドイツ革命において指導権を握るのは結局ブルジョアジーしか存在しないと結論づけます。

この現状を打倒することのできる階級が、ドイツに存在しているであろうか？ それは存在している。たしかに、イギリスやフランスのこれに対応する階級に比べれば、きわめて小市民的な形ではあるが、とにかく存在している。他ならぬブルジョアジーという形で存在している。ブルジョアジーは、あらゆる国で、官僚的君主制のもとで打ち立てられた貴族と小市民との妥協をくつがえし、こうして、さしあたって自分のために支配権を獲得する階級である。……

ブルジョアジーの党は、現状を何と替えたらいかを明確に知っているドイツでただ一つの党である。抽象的な原理や歴史的演繹だけにとどまらないで、きわめて明確な、明瞭な、ただちに実行できる措置を遂行しようとしているただ一つの党である。……要するに、第一線に立って現状とたたかっており、現状の打倒に直接に参加している党である。だから、ブルジョアジーの党は、さしあたって成功の見込みを持っている唯一の党である。(4:54)

このように、ドイツのブルジョアジーは「イギリスやフランスのこれに対応する階級に比べれば、きわめて小市民的」であるが、現体制を打倒するだけの政治的・経済的力量を持った階級は、そしてそのことに強い利害関係を持った階級はブルジョアジーしかいないと結論づけているわけです。これは、労働者階級は普遍的な苦悩を持っているから一挙に社会変革の担い手になりうるというような観念的議論ではなく、史的唯物論に基づき、ドイツの現状を具体的に分析した結論として導き出されおり、したがって、直線Ⅰ上に位置するとはいえ、出発点たる一挙解放論よりもより高い所に位置しているわけです。



### マルクスの認識

この点は、当時のマルクスにあっても同じです。エンゲルスだけがこのような段階論をとっていたというような誤解が生じないように、マルクスのものも引用しておきます。『ライニッシャー・ベオバハター』紙の共産主義(1847年9月)という論文の中で、マルクスは次のように述べています。

問題は、現在の政治状態、すなわち官僚主義の支配と、自由主義者が求めるもの、すなわちブルジョアジーの支配と、いずれがプロレタリアートにより多くの目的達成手段を提供するかである。ブルジョアジーの支配がプロレタリアートの手に反ブルジョア闘争の最新兵器を与えるばかりかこれまでとはまったく異なった一地位、すなわち公認政党としての地位をも得させるものであることを見るためには、イギリスやフランスやアメリカのプロレタリアートの政治的地位とドイツのそれとを比較しさえすればよい。(4:201)

このように、マルクスは、まずもってブルジョアジーに権力を取らせるべきであり、そのことがドイツのプロレタリアートにより自由に自分たちの目的のために戦う余地を、そのための手段と地位を与えるのだと主張しています。しかし、ドイツのブルジョアジーは臆病で脆弱で、すでにプロレタリアートと対立しているのではなかったのか？ まさにそのとおりです。実際、マルクスは「道徳的批判と批判的道徳」(1847年10月)という論文の中で、まさに『独仏年誌』で自分が述べたことをあ



えて取り上げています。

私がすでに『独仏年誌』で分析したように、ドイツは、独自のキリスト教的＝ゲルマン的不運を担っている。ドイツのブルジョアジーは、非常に遅れてやってきたので、すべての発達した諸国でブルジョアジーがすでに労働者階級と最も激しい闘争を始めており、またその政治的幻想がすでにヨーロッパ的意識においては時代遅れとなっていたときに、彼らはその絶対君主制との闘争を始め、その政治権力を打ち立てようと試みている。この国には絶対君主制という政治的不幸が衰退した半封建的諸身分と諸関係というおびただしい付録とともにいまなお存続しているが、他方では、部分的にはすでに産業的発展とドイツの世界市場への依存との結果として、ブルジョアジーと労働者階級とのあいだの近代的対立、およびそれから起こってくる闘争——たとえばシュレーゲンとベーメンの労働者の蜂起——も存在している。だから、ドイツのブルジョアジーは、彼らがまだ階級として政治的に形成される以前に、すでにプロレタリアートと対立しているのである。（4：368-369）

ここでの分析はまさに「ヘーゲル法哲学批判序言」の内容そのものであり、かつその後起きたシュレーゲンの織工蜂起も踏まえられています。しかし、このことから出てくる結論はまったく異なります。

ところが、ドイツの労働者は、絶対君主制がブルジョアジーに奉仕して砲弾と答打ちを彼らにお見舞いすることを一瞬もためらわないし、またためらうこともできない、ということをよく知っている。では、彼らはなぜ半封建的従者をもつ専制政府の野蛮な誅求よりも、直接のブルジョア支配を選ばなければならないのか？ 労働者は、ブルジョアジーが政治的に彼らに対して絶対君主制よりも大幅な譲歩をしなければならぬばかりでなく、彼らの商業と工業とのためには、その意志に反して労働者階級の結合のための条件をつくりだすこと、また労働者の結合はその勝利の第一の要件である、ということをよく知っている。労働者は、ブルジョアの所有関係の廃止は、封建的所有関係の維持によってはできないということを知っている。彼らは封建的身分と絶対君主制とに対するブルジョアジーの革命運動によって彼ら自身の革命運動は促進されるばかりだ、ということを知っている。彼らは、ブルジョアジーが勝利したその日にはじめて、彼ら自身のブルジョアジーとの闘争が現われはじめるのだ、ということを知っている。それにもかかわらず、彼らはハインツェン氏のブルジョアの幻想をともにするものではない。彼らは、ブルジョア革命に、労働者革命の一条件として参加することができるし、またしなければならない。しかしながら、彼らは瞬時もそれを彼らの究極目的とみなすことはできない。（4：369）

このように、ブルジョアジーの臆病さにもかかわらず、労働者階級は、自らがブルジョアジーの代わりに一挙的に解放を行なうのではなく、まずもって、ブルジョアジーに勝利を確保させ、彼らを支配階級にしなければならないと言われていました。そして、ブルジョアジーが勝利してはじめて、ブルジョアジーとの闘争がようやく始まるのだとしています。これは明らかに段階論的発想です。しかし、続けて「ブルジョア革命に、労働者革命の一条件として参加することができるし、またしなければならない」とあるように、すでに、段階革命論の線上にあるとしても、そこには直線Ⅱへの傾きが存在しているわけです。

### プロレタリア革命の序曲としてのブルジョア革命

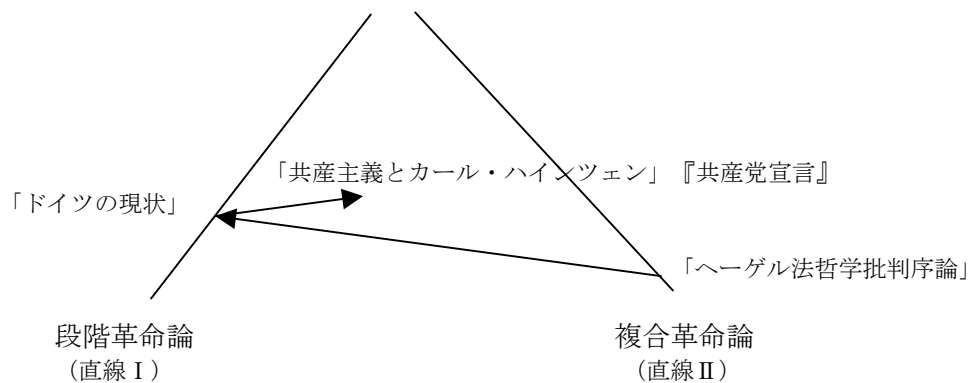
「ブルジョア革命に労働者革命の一条件として参加する」ということは、ドイツ革命そのものにも特殊な刻印を押すはずで、それはけっしてフランス革命の単なるドイツ的再演ではありえません。この点をより具体的に述べているのが、エンゲルスの「共産主義とカール・ハインツェン」（1847年10月）という論文であり、そしてあの有名な『共産党宣言』（1848年2月）の一節なのです。まずは、エンゲルスの「共産主義とカール・ハインツェン」を見てみましょう。

競争を制限し、個々人の手に大資本が堆積するのを制限するためのすべての施策、相続権のあらゆる制限または廃止、国家の側から行なわれるいっさいの労働組織、これらすべての施策は、革命的施策として可能であるばかりでなく、また必然でさえもある。それが可能なのは、蜂起した全プロレタリアートがその背後にあって、武力をもってそれを維持するからである。経済学者たちによってこれに反対して主張されるあらゆる難点や弊害があるにもかかわらずそれが可能なのは、まさにこの難点や弊害こそが、プロレタリアートを駆って、先へ先へと進ませ、自分の既得物を2度と失わないためにも、ついには、私的所有の完全な廃止へとおもむかせるからである。それは私的所有廃止のための準備として、過渡的な中間段階として可能なのである。しかしまたそれ以外のものではない。（4：

このように、ブルジョア革命を自己完結的に捉えるのではなく、労働者階級はその革命に参加することで、革命をいっそう先に進ませないかぎり実現できないような要求を下から「武力でもって」突きつけることによって、「私的所有の完全な廃止へとおもむかせる」と主張しています。ここには明らかに、永続革命論と共通した認識が見られます。そしてこの一文が、マルクスとエンゲルスの『共産党宣言』におけるあの有名な「ドイツのブルジョア革命はプロレタリア革命の直接の序曲となるほかはない」という一句に直接つながっていることは明らかでしょう。

ちなみに、このエンゲルスの「共産主義とカール・ハインツェン」を無視して、マルクスとエンゲルスとの人為的な対立軸を作ろうとする人がいます。マルクスは複合的革命論者だが、エンゲルスは機械的な段階革命論者だ、という対立図式です。しかし、これには資料的裏づけはありません。

ですから、直線Ⅱの底辺あたりから出発した議論は、史的唯物論の確立を経て、いったんは直線Ⅰに移るんだけど、ドイツ革命の展望が目の前に迫ってくる段になると、すでに、再び直線Ⅱへの移動が始まるわけです。この再転換は、実際に起こったドイツ革命を含む 1848 年革命の経験によって決定的なものになります。



#### 4、1848 年革命の衝撃とドイツ革命論の再転換

さてついに 1848 年革命が起こります。1 月にイタリアの各王国で最初の革命の狼煙火があがっていますが、直接、マルクス・エンゲルスに衝撃を与えたのは、やはりフランスの 2 月革命であり、7 月王政が倒れて、フランス第 2 共和制が成立したことです。この衝撃はまたたく間にヨーロッパ各地に広まり、3 月にはオーストリアの首都ウィーンで革命が起こり、直後にベルリンで革命が起こり、カンパハウゼンを首班とする自由主義政府が成立します。さらに、ハンガリー、ポーランド、ガリツィア、スロベニア、ワラキア、さらには遠くブラジルでも革命が起こります。これらは基本的にブルジョア革命ですが、フランスでは 6 月に初めての労働者階級の蜂起である 6 月事件が起こります。こうして 1848 年革命は文字通り一個の連続した世界革命に転化し、ヨーロッパ全体で革命と動乱が起きます。

みなさんもお存知のように、マルクスとエンゲルスはフランス 2 月革命以前から共産主義者同盟を形成しており、2 月革命の勃発とともにこの革命の渦中に飛び込み、その後、ともに『新ライン新聞』を発行編集して、その中で革命の経過を日々分析し、てきじ革命の指針を提示し、民衆に呼びかけ、新たにできた諸政府を容赦ない批判に付しました。

この 1848 年革命は、すでに直線Ⅱに再移行し始めていたマルクス・エンゲルスを一気に直線Ⅱのより高い水準へと移行させます。その決定的な契機になったのが、1 つはパリ 6 月蜂起におけるプロレタリアートの大胆さ、行動力と、それに対するブルジョアジーの容赦ない弾圧であり、もう 1 つは、各国ブルジョアジー、とくにドイツ・ブルジョアジーがすぐに旧支配体制と妥協し始め、自ら獲得した権力を早々に手放し、旧支配層に屈したことです。結局、1849 年には、ヨーロッパのほとんどで革命は粉碎され、革命の部分的成果は残ったとはいえ、大枠では旧体制に戻ってしまうことになりました。

##### マルクスの「ブルジョアジーと反革命」

この過程の中でマルクスとエンゲルスは自らの考えを大きく発展させます。革命直前までは、ドイ

ツ・ブルジョアジーは臆病で脆弱であるといっても、それでもやはり次の段階はブルジョアジーによる政治支配だと思っていました。ところがそのブルジョアジーは、下からの民衆の革命によって権力に押し上げられ、客観的には完全に支配権を掌握できる絶好の地位についたにもかかわらず、自らを権力に押し上げた労働者、小ブルジョアジー、農民に対する恐怖感ゆえに、旧体制にしがみつこうとし、その権力を旧体制に譲り渡してしまったのです。

これを見たマルクス・エンゲルスは、ドイツ・ブルジョアジーに対する判断を決定的に変えていきます。その最初の表明として有名なのが、プロイセンにおける 11 月の反革命クーデターの直後に発表されたマルクスの「ブルジョアジーと反革命」（1848 年 12 月）です。後年、トロツキーもよく引用する論文ですので、トロツキーがこの論文の影響を直接受けたことがわかります。

この中でマルクスは、「ヘーゲル法哲学批判序説」や「道徳的批判と批判的道徳」ですでに展開されていた、遅れてやってきたドイツ・ブルジョアジーの脆弱さ、臆病さという議論を踏まえつつ、それが今回の革命において、人民によって後ろから押し出されたために革命の舵を取らざるをえなくなったことが言われています。

プロイセンのブルジョアジーは、1789 年のフランス・ブルジョアジーとは違って、古い社会の代表者である王権や貴族に対抗して、近代社会全体を代表する階級ではなかった。彼らは、王権にも人民にも同じように鋭く対立する一種の身分になりさがっていて、その双方に対して敵意を燃やしていたが、いつも腹背に 2 つの敵を控えているために、この敵のそれぞれにむかって決断を欠いていた。彼らは、自分自身すでに古い社会に属していたため、はじめから、人民を裏切りやすく、古い社会の代表者である王権と妥協しやすい傾きがあった。彼らは、古い社会に対抗して新しい社会の利益を代表するのではなく、老衰した社会の内部で、むしかえされた利益を代表していた。彼らが革命の舵をとったのは、人民が彼らの後に従ったためではなく、人民が後から彼らを押し出したためであった。彼らが先頭に立ったのは、新しい社会的時代の創意を代表していたからではなく、古い社会的時代の怨みを代表していたからにすぎなかった。（6：104）

しかし、この「革命の舵」をとらざるをえなくなったブルジョアジーはたちまちその政治的本性を赤裸々にします。この本性をマルクスは次のような非常に印象深い、怒りのこもった言葉で表現しています。

彼らは……自分自身を信頼せず、人民を信頼せず、上に向かってはぶつぶつ言い、下に向かっては恐れ、どちらに向かっても利己的で、自分の標語を自分で信じず、思想の代わりに空文句でまにあわせ、世界の嵐におびえ、世界の嵐をだしにつかひ——どの方面でも無気力で、あらゆる放面で剽窃し、独創を欠くゆえに下劣であり、下劣さにかけて独創的であり——自分の願望を自分でねぎり、創意なく、自分自身を信頼せず、人民を信頼せず、世界史的使命をもたず——強健な人民の青春の流れを、自分自身の老衰した利益に応じてわき道にそらせることが自分の宿命だと感じている、いまましい老いぼれ——目もなく！耳もなく！歯もなく、何もない——これが、3 月革命のあとでプロイセン国家の舵をとったプロイセン・ブルジョアジーの姿である。（6：104-105）

マルクスは、権力の座についてドイツ・ブルジョアジーに対してこのような致命的な判決を下しました。ブルジョアジーはまったく革命の主導権を握れないし、それを推進する能力を根本的に欠いていたわけです。ドイツのブルジョアジーは、マルクスとエンゲルスが革命以前に認識していた以上に反革命的であることが明らかになったのです。

### エンゲルスの「ドイツ国憲法戦役」

これはまだ 1848 年段階で、革命そのものの帰趨はまだ明らかになっていませんでした。しかし、その 1 年後、革命の帰趨がほぼ明らかになった（少なくともその第一ラウンドが終了した）時期において、マルクスとエンゲルスはいっそう首尾一貫した革命論的結論を下すようになります。まず重要なのが、エンゲルスの「ドイツ国憲法戦役」（1850 年 1～3 月）（執筆は 1849 年 8 月～1850 年 2 月）です。ドイツ国憲法戦役というのは、ドイツの新しい憲法を守ろうとしてバーデンなどで繰り広げられた革命派と反革命派との局地戦のことで、エンゲルス自身が一革命部隊の副官として参加しています。この戦役の詳細について手記風に書いたのがこの論文で、当時、マルクスとエンゲルスによって書かれたさまざまな文献の中で、最もトロツキーの永続革命論に近いものですが、これも何ゆえかマルクスとエンゲルスの革命論を論ずる人たちによっておおむね無視されています。エンゲルスはまず冒頭部分で、ドイツ・ブルジョアジーの政治的臆病さという議論をより総括的な形で述べています。

大・中ブルジョアジーのうちの反政府的な層は、支配的な層に対抗して、小ブルジョアジーと利害を共通にしており、共同の闘争のためにこれと連合する。ドイツでは、軍隊、官僚および封建貴族のほとんど独占的な支配が、武装した反革命派の手で復活されており、立憲的形態がなお存続しているにもかかわらず、ブルジョアジーがきわめて従属的な、つつましい役割しか演じていないために、こういう同盟を結ぶ動機ははるかに多い。しかし、その代わりにまた、ドイツのブルジョアジーは、イギリスやフランスのブルジョアジーに比べてはるかに臆病であって、無政府状態が再現する可能性、つまり本当の決定的な闘争が起こる可能性がほんの少しでも現れるやいなや、身ぶるいして舞台から引き下がってしまう。今度もやはりそうであった。(7:109)

革命以前からある程度このような認識を持っていたことは、すでに述べてきましたが、革命の敗北という結果を受けてエンゲルスはこのことからきわめて大胆な結論を引き出します。

ドイツ国憲法戦役は、それ自身の中途半端さと内部的なみじめさのために挫折した。1848年6月の敗北以来、ヨーロッパ大陸の文明諸国にとっての問題は、革命的プロレタリアートの支配か、2月革命以前に支配していた諸階級の支配か、ということである。中道はもはや不可能である。とくにドイツではブルジョアジーは、支配する能力を持たないことを明らかにした。彼らは、その支配権を再び貴族と官僚に譲り渡すことによつてのみ、人民に対抗して自分の支配を維持することができた。小ブルジョアジーは、ドイツ的イデオロギーと結んで、ドイツ国憲法という形で、決戦を延ばすことを使命とする実現不可能な妥協を試みた。この試みは失敗せざるをえなかった。運動に真剣なものは、ドイツ国憲法に真剣にならなかつたし、ドイツ国憲法に真剣なものは、運動に真剣にならなかつた。

だが、それにもかかわらず、ドイツ国憲法戦役のもたらした結果は重大なものであった。それは、何よりも情勢を単純にした。それは、はてしない調停の試みの連鎖を断ち切った。この戦役が敗北に終わったあとでは、いくぶん立憲化した封建的＝官僚的君主制が勝利するか、それとも真の革命が勝利するか、そのどちらでしかありえない。しかも、ドイツでは、革命は、プロレタリアートの完全な支配が打ち立てられるまでは、もはや終結することはできない。(7:201)

このように、エンゲルスは、「ドイツではブルジョアジーは、支配する能力を持たないことを明らかにした」と述べ、今後革命は、いくぶん立憲化した封建的＝官僚的君主制が勝利するか、それとも真の革命が勝利するかどちらかであると述べ、とくにドイツでは、革命は、「プロレタリアートの完全な支配が打ち立てられるまでは、もはや終結することはできない」との結論を下しています。これが、1905年革命の経験に基づいてトロツキーが引き出した結論ときわめて類似していることは明らかです。

### マルクス・エンゲルスの「3月回状」

マルクスとエンゲルスの文献のうち最も永続革命的な立場をとったのは、革命の余波と興奮が残っていたこの時期のものですが、その中で一般によく引用されるのは、この「ドイツ国憲法戦役」ではなくて、「1850年3月における中央委員会の同盟員への回状」(1850年3月)です。ここでも基本的なポジションは同じなのですが、ちょっと違うのは、「ドイツ国憲法戦役」が革命的プロレタリアートの支配か2月革命前の諸階級の支配かというより先鋭な二者択一を提起していたのに対して、この「3月回状」は、民主主義的小ブルジョアジーによる支配というある種の中間的移行期を想定しているところです。

この「回状」についてはよく知られているので、詳しく紹介することはせず、1つの興味深いポイントだけ紹介しておきます。マルクスとエンゲルスは、共産主義者同盟の同盟員がなすべき行動について列挙する中で、次のように述べています。

労働者は、新しい公式の諸政府と並行して、市町村参事会や市町村議会の形であれ、労働者クラブまたは労働者委員会を通じてであれ、独自の革命的な労働者諸政府を打ちたて、こうして、ブルジョア民主主義的諸政府からただちに労働者の支持を奪い取るだけでなく、労働者の全大衆を背後にひかえた権力機関によって始めから監視され威嚇されているのだということを、これらの政府に理解させなければならない。(7:255)

これはまさに二重権力理論です。地方規模であるとはいえ、すでに公式の諸政府とは独立して労働者自身の諸政府を作れと言っています。この文言が後に文字通り直接の指針となって、1905年にメン

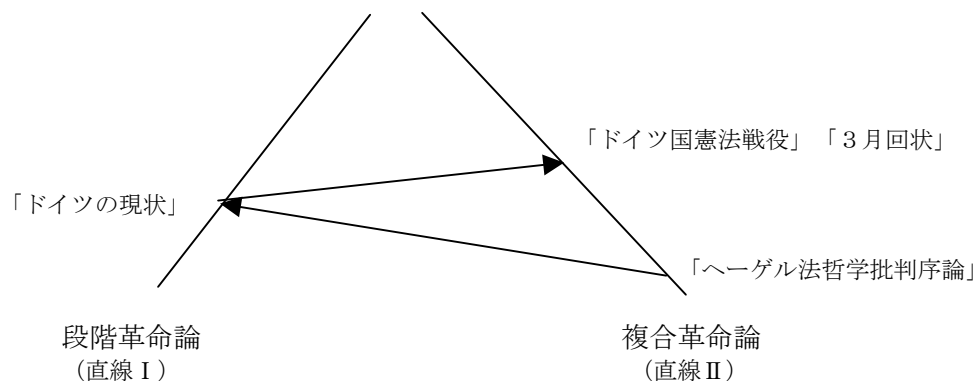
シェヴィキはソヴィエトを結成するわけです。その 12 年後にはソヴィエトがロシア全体の全国的権力機関となるのですから、マルクスとエンゲルスがさりげなく書いたこの一文が、歴史に非常に大きな役割を果たしたとも言えますが、現在はあまり注目されていません。

最後に、この回状は次のような有名な一句で締めくくられています。

ドイツの労働者は、かなり長い革命的発展を完全に経過しつくさないうちは、支配権を握ることもできず、彼らの階級利益を貫くこともできないが、今度は、少なくとも、この来たるべき革命劇の第一幕がフランスにおける彼ら自身の階級の直接の勝利と時を同じくして起こり、それによって大いに早められることを、確実に知っている。しかし、労働者が最後の勝利を得るためには、彼ら自身がいちばんに努力しなければならない。すなわち、自分の階級利益を明らかに理解し、できるだけ速やかに独自の党的立場を占め、一瞬といえども民主主義的小ブルジョアの偽善的な空文句に迷わされずに、プロレタリアートの党の独立の組織化を進めなければならない。彼らの戦いときの声はこうでなければならない——永続革命。(7:259)

ここで言われている「永続革命」は後にトロツキーの言う「永続革命」とはけっして同じではありません。というのも、マルクスとエンゲルスは小ブルジョアジーが支配権を握る一段階を必然的な前提にしているからです。トロツキーはそういうもの必ずしも前提にしていなかったから、きわめて接近しているけれども同じではありません。

いずれにせよ、「ドイツ国戦役」もこの「回状」もこの直線Ⅱの線上に位置することは明らかです。ですから「否定の否定」で、マルクスとエンゲルスの革命論は、出発点としての「一挙解放論」から、いったんは直線Ⅰに足をかけ、その上で、ドイツの現実分析と 1848 年革命という具体的な経験を踏まえて、直線Ⅱ上にあるより高度でより説得力がある革命論へと上昇したわけです。



ちなみに、この時点ではマルクスもエンゲルスもまだ革命が完全に終結したとは思っておらず、せいぜいその第一ラウンドが終わっただけだと思っていました（「かなり長い革命的発展を完全に経過しつくさなければならない」）。というのも、過去の大革命の経験からして、革命というのは1年や2年で終わったりせず、最後の頂点に達するまで何年もかかっているからです。たとえば、当時の革命派が誰しも規範にしていたフランス大革命では、1789年から始まって93年のジャコバン独裁で頂点に至り、94年のテルミドール反動で終結するまで、足かけ5年もの歳月がかかっています。ですから、大規模な革命というのは1年や2年で終結するものではない。少なくとも数年。だいたいそういうイメージでした。したがって、1850年の3月段階でも、さらに革命が盛り上がり、むしろいっそう急進化するとマルクスとエンゲルスは考えていたのです。

## 5、反動期におけるマルクスとエンゲルスのドイツ革命像

ところがその後、マルクスとエンゲルスは立場を大きく変えます。同じ年の9月には、すでに革命情勢は終わったとの判断を下します。1850年3月時点では、共産主義者同盟の同盟員たちに向けてさらなる革命に向けて檄を飛ばしたにもかかわらず、そのわずか半年後には革命情勢は終わった、革命、革命と言うのは冒険主義者であると言い出します。そのため、共産主義者同盟は、マルクスとエンゲルスが率いる多数派と、シャッパーやヴィリヒが率いる少数派とに分裂します。

なぜこのような転換が起こったかと言うと、それは恐慌と関係があります。周知のように、1848年革命は1847年の恐慌の衝撃のもとで起こりました。1848年の革命と前年の恐慌とのあいだにどれほ

ど相関関係があるのかは議論の余地があるのですが、少なくともマルクスとエンゲルスは 1848 年革命を引き起こす上で重要な衝撃を与えたのが前年に起こった恐慌であったと考えていました。ところが、この恐慌はすでに 1849 年には終息しはじめ、1850 年には好況のはっきりとした徴候が見られるようになったのです。このころのマルクス・エンゲルスは、「恐慌＝革命論」の立場でしたから、1850 年に力強い景気回復が見え始めたことが、この急転換のきっかけになっています。

最初のうちマルクスとエンゲルスは、今は景気回復が進んでいるけれども、それはすぐに終息し、過剰生産に陥って、数ヶ月で 1847 年以上の大恐慌になる、そしたらヨーロッパ中で再び人民が立ち上がって、今度こそ完全に旧体制を一掃し、何年もかけて最終的にプロレタリアートの支配へと至るだろうと考えていました。ところが数ヶ月で恐慌が起こるところか、ますます経済は活発になり、産業がものすごく繁栄していく。その一方で、運動は急速に衰退し、あちらこちらで粉砕され、旧体制が復活していき、革命家は次々と亡命を余儀なくされていく。そうした状況を見てマルクス・エンゲルスは戦略を転換すべきであると考えようになったのです。

### 9月15日の議事録

この時期の文献として重要なのは、この分裂が最終的に確認された 9月15日の会議の議事録です。『マルクス・エンゲルス全集』の第8巻に入っていますから、それを少し見ておきましょう。

**マルクス** われわれは労働者にこう言っている、「諸君は諸関係を変え、諸君自身が支配能力をもつようになるために、なお 15 年、20 年、50 年間というもの、内乱を通らなければならない」と。ところが諸君〔少数派〕はこう言っている、「われわれはただちに政権を握らなければならない。それができなければ寝てしまってもかまわない」と。民主主義者が「人民」という言葉を単なる空文句として使ってきたように、いまでは「プロレタリアート」という言葉が単なる空文句として使われている。この空文句を実行するためには、すべての小ブルジョアをプロレタリアと宣言し、したがって実際にはプロレタリアではなく小ブルジョアを代表しなければならなくなるであろう。真の革命的発展を、革命という空文句とすりかえなければならなくなるであろう。(8: 583)

マルクスがここで冒頭で「諸君自身が支配能力をもつようになるために、なお 15 年、20 年、50 年間というもの、内乱を通らなければならない」と言っているのはやや大げさです。マルクスが「3月回状」で言っていた「長い期間」というのはせいぜい数年だったはずです。さもなくば、あんな切迫した調子の文章にはならなかったでしょう。それはそうと、このマルクスの主張に対して少数派のシャッパーはこう答えています。

**シャッパー** フランスでは労働者の番になるだろう。それとともに、ドイツでもわれわれの番になるだろう。そうならなければ、私はもちろん寝てしまうだろう。そのときには私の物質的な状態は別のものとなるだろう。われわれの番になれば、われわれはプロレタリアートの支配を確保するような措置をとることができるだろう。私は、こうした見解を熱狂的に支持している。しかし中央委員会はその反対のことを望んできた。……私はドイツでブルジョアが権力を握るだろうという意見ではない。(8: 585)

ここでシャッパーが言っていることはまさに、わずか半年前にマルクスやエンゲルスが言っていたことと(やや雑ではありますが)基本的に同じです。シャッパーもまた、「3月回状」と同じく、革命の先端を切るのはフランスで、そこではプロレタリアートが支配権を握るだろうから、その衝撃を受けてドイツの番になる、そしてドイツではブルジョアジーが権力を取ることはないから、プロレタリアートが権力を取ることになるのだ、と。まさに「ドイツ国憲法戦役」や「3月回状」の論理そのものです。ところが、それに対してマルクスは次のように反論しています。

**マルクス** 私は常にプロレタリアートの一時的な意見に反対してきた。われわれは、党自身にとって幸せなことにまだ権力に就くことのできない党に身を捧げている。もし権力を握るようなことになるなら、プロレタリアートは、直接プロレタリア的ではなく、小ブルジョア的な方策をとることになるだろう。わが党は、周囲の事情が党の見解を実現することを可能にするようになったときに初めて、権力を握ることができるのである。ルイ・ブランは、時期尚早に権力を握った場合にはどうなるかを示す最良の実例を提供している。もっとも、フランスではプロレタリアは単独で権力を握るのではなく、彼らとともに農民と小ブルジョアが権力を握るであろう。そしてプロレタリアは自分の方策ではなく、農民や小ブルジョアの方策を実行せざるをえなくなるであろう。(8: 585-586)

もしこのマルクスの発言が正しいとすれば、自分たちがわずか半年前に言っていたことはどうなるのか、という問題が生じますが、いずれにせよ現実において革命は終息しつつあり、労働者階級は決起せず、「3月回状」で同盟員に指示されていたような諸戦術、諸戦略を実行しようとするような本格的な労働者階級がまだ存在していなかったことは間違いないわけです。ですから、ここでのマルクスの判断は正しかったと言わざるをえません。つまり、この時点でもう一回、直線Ⅰの方に戻って、ただしその直線上のより高いほうへと移行して、この1849～1850年初頭にかけてマルクスとエンゲルスが展開した戦略を担うような労働者階級の成長を待たなければならなかったのです。

### エンゲルス『ドイツにおける革命と反革命』

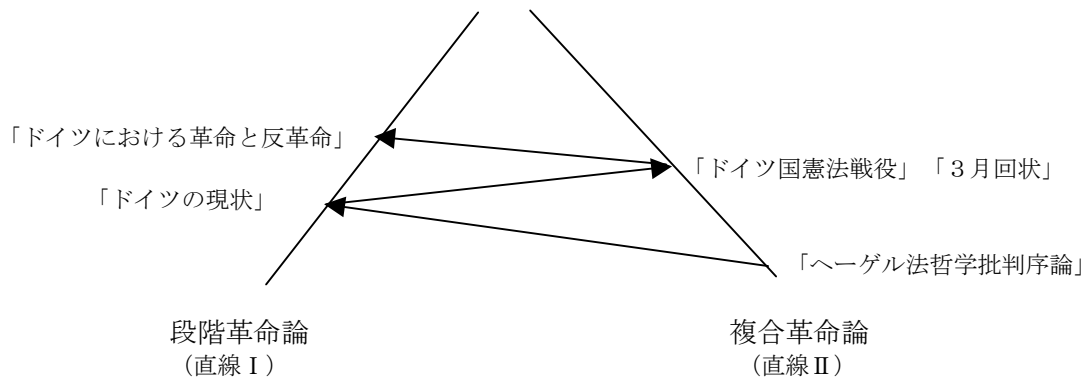
この点を最もはっきり言ったのは、エンゲルスの「ドイツにおける革命と反革命」（1851年8月～1852年9月）です。その「第一論説」（1851年8月執筆）において、後に非常に有名になり、あらゆる段階革命論者たちが（後で紹介する『資本論』の一節と並んで）最も引用する権威の一つになった一文が書かれています。

ドイツの労働者階級が、社会的・政治的発達でイギリスやフランスの労働者階級にはるかに遅れているのは、ドイツのブルジョアジーがこの両国のブルジョアジーに遅れているのと同じである。主人が主人なら、下男も下男というわけだ。多人数の、強力で集中した、知性あるプロレタリア階級の存在条件の発達は、多人数の、富裕で集中した強大な中間階級の存在条件の発達と手をたずさえて進むものである。中間階級のさまざまな層のすべてが、とくにその最も進歩的な層である大工業家が、政治権力を獲得して、彼ら自身の必要に応じて国家をつくりかえるまでは、労働者階級の運動そのものも、独立的なものとはけっしてならないし、純プロレタリア的な性格を帯びることはけっしてない。中間階級がこの目標をなしとげたときにはじめて、雇い主と被雇用者とのあいだの不可避的な衝突がさし迫ったものとなり、もはや延期できないものとなる。……ところが、ドイツでは、労働者階級の大多数は、イギリスがあのように立派な見本を提供している近代の工業貴族に雇われているのではなくて、その生産方法全体が中世の遺物にすぎないような小手工業者たちに雇われていた。そして、大綿業貴族とちっぽけな靴屋や仕立て屋の親方とでは天地の違いがあるように、近代の工業バビロンの十分目覚めた工業労働者と、500年も昔の同業者とほとんど変わらない環境に暮らし、ほとんど変わらないやり方で作業している小さな田舎町の内気の仕立て職人や家具職人との間にも、やはりたいへんな相違がある。……だから、革命が勃発したときに、労働者階級の大きな部分がギルドや中世的な特権的同職団体の即時復興を叫んだことも不思議ではない。（8：10-11）

この引用文の冒頭箇所——「ドイツの労働者階級が、社会的および政治的発達でイギリスやフランスの労働者階級にはるかに遅れているのは、ドイツのブルジョアジーがこの両国のブルジョアジーに遅れているのと同じである。主人が主人なら、下男も下男というわけだ」——は、後にトロツキーが「総括と展望」で批判的に引用しているので、ご存知の方も多いと思います。トロツキーは、この部分を引用して、ここでの文言を教条化するマルクス主義者がいるが、それは当時における状況的発言であって、これを普遍的一般的な真理にするのは間違いだと釘を刺しています。それはさておき、ここでは、プロレタリアートが遅れているのはブルジョアジーが遅れているからだとする命題が述べられています。1849～50年においては、ブルジョアジーが遅れているので革命の主導権を握ることができず、プロレタリアートがその代わりをするという論理が見られましたが、ここではブルジョアジーの遅れとプロレタリアートとの遅れとは順接関係で捉えられています。そして、続く部分では、労働者階級の運動が独立したものになるのは、ブルジョアジーが支配権を獲得してからだ、と言われていきます。

エンゲルスは、その根拠として、かつての「ドイツの現状」での分析と同じく、当時におけるドイツ労働者の手工業性、分散性、ギルド的性格を具体的に指摘しています。たしかに労働者は立ち上がったが、ブルジョア社会より高度な社会を要求したのはごく一部で、大多数は古きよきギルト特権社会的体制に戻せと要求した、大工業との競争にさらされて生活ができなくなったので、以前のような体制に戻せと主張したというのです。これではまったく永続革命の過程にはなりません。エンゲルスは、自分たちが1849～50年初頭に主張したような革命を担う労働者階級がまだ存在していなかったことを気づいて、ドイツではもっと資本主義が発達した後でないのだめだという判断を下したのです。これは、当時における認識としては、やはり正当であったと言わざるをえないでしょう。したがって、ここでエンゲルスは、明らかに直線Ⅱ上のどこかの地点ではなくて、直線Ⅰの上に移行したの

です。



ところで、この論文はあくまでもエンゲルスのものだから、マルクス考えはそうではないのではな  
いか、という異論が起きることが想定されますので、そのような異論が成り立たないことをあらかじめ  
め言っておきます。この「ドイツにおける革命と反革命」は、『ニューヨーク・デイリー・トリビュ  
ーン』というアメリカのリベラル派の新聞に連載されたものですが、この新聞への投稿の依頼は実は  
マルクスに対してなされたものでした。ところがマルクスは、1851年当時は経済学の研究に没頭して  
いたし、またロンドンに亡命したばかりで、英語をまだ自由に使えなかったので、お金のためにこの  
依頼を受けつつも、その論文の執筆を、イギリスに長く暮らしてすでに英語が自由に使えた盟友  
エンゲルスに任せたのです。そこでエンゲルスは1年ほどずっとマルクスの名前で論文を寄稿し続け、  
それが『ドイツにおける革命と反革命』という著作になりました。そのため、マルクス派の世界でも  
ずっと、これがマルクスの論文だと思われていました。トロツキーも、これをマルクス執筆のもの  
として引用しています。その後、かなり経ってから、マルクスとエンゲルスの往復書簡集が公開されて  
はじめて、実はこれがエンゲルスの書いたものであることがわかったのです。エンゲルスは、マル  
クスの名前で発表するのだから、当然ながら、事前にマルクスに原稿を送って、内容を確認してもら  
っています。その時の書簡を引用しておきましょう。

まず、1851年8月21日付のマルクス宛ての手紙の中で、エンゲルスはこの論文を同封した上で、  
次のように述べています。

自分で勝手に決めたテーマの論文 [『ドイツにおける革命と反革命』の第一論説] を一つ同封して  
おく。いろいろな事情に妨げられて、まずいものしか書けなかった。……要するに、それを君の好き  
なようにしてくれたまえ。(27:269)

この手紙に対して、マルクスは数日後に次のように答えています(1851年8月25日付、マルクス  
からエンゲルスへの手紙)。

親愛なるエンゲルス！ 何よりもまず君の論文に感謝する。君はそれをいろいろ悪く言っていたが、  
立派なものだった。手を加えないままにニューヨークに向かって航海している。(27:271)

つまり、マルクスはエンゲルスの論文をちゃんと目を通した上で、それは立派なものだと言い、い  
っさい手を加えずにニューヨークに送ったということです。ここでも、エンゲルスは段階革命論者、  
マルクスは永続革命論者みたいに振り分けるのが、いかに不当であるかがわかります。

## 6、『経済学批判』序言と『資本論』初版序文

このように、この時点で、両名はいろいろとジグザグした挙句、直線 I の線上に現時点ではいると  
いう状況になりました。多くの研究者は、これ以降のマルクス、エンゲルスの理論的發展を無視して、  
基本的にマルクスとエンゲルスは 1848~50 年の永続革命論を否定するに至ったのだ、だからトロツキ  
ーはマルクスの革命論と無縁だ、という議論がされがちですが(あるいは、次回取り上げる晩年のマ  
ルクス、エンゲルスのロシア革命論を取り上げて、複合革命論への回帰として結論づける論者もいま



すが、次回明らかにするように、両者はまったく異なった次元に位置しており、両名のロシア革命論をそのドイツ革命論の延長に位置づけることはできません）、しかしこれはまだ終わりではありません。しかし、この時期がかなり長かったのも事実です。なぜなら、それ以降、革命情勢がまったく訪れず、長い反動期になるからです。たしかに、部分的にはいくつかの地方で革命や戦争が起りましたが、ヨーロッパの中心部においては、1871年のパリ・コミュンまでは起こらなかったし、このコミュンも結局は一都市の騒動に終わりました。

しかし、この1850年以降の20年以上におよぶ反動期のおかげで、マルクスは政治から一定はなれて経済学の勉強に没頭することができ、最終的に『資本論』第1巻を書き上げることができたのです。もしこの間に何度も革命が起きていたら、たぶん『資本論』は書かれなかったでしょう。そして、『資本論』が書かれなかったとしたら、マルクスの思想はその後も多くは社会主義思想の一つ、「ウンブゼン」でしかなかったでしょう。

### 『経済学批判』序言における史的唯物論の公式

さて、この時期のものとして有名なのが、マルクス『経済学批判』序言（1859年）におけるいわゆる「史的唯物論の定式」であり、マルクス『資本論』初版序文（1867年）におけるあの有名な一節です。これらは、マルクス主義陣営において、段階革命論を根拠づけるものとしてよく使われるようになるので、ここで簡単に見ておきましょう。まず、『経済学批判』序言における「史的唯物論の公式」です。長いので一部だけ引用しておきます。

一つの社会構成体は、それが生産諸力にとって十分の余地をも持ち、この生産諸力がすべて発展しきるまでは、けっして没落するものではなく、新しいより高度な生産諸関係は、その物質的存在条件が古い社会自体の胎内で孵化されてしまうまでは、けっして古いものにとって代わることはない。それだから、人間は常に自分が解決しうる課題だけを自分に提起する。なぜなら、もっと詳しく考察してみると、課題そのものは、その解決の物質的諸条件がすでに存在しているか、または少なくとも生まれつつある場合にだけ発生することが常に見られるであろうからだ。（13：7）

何らかの社会構成体というのは、その中で十分に生産力が発達しきるまで減じることはないし、新しい生産関係がその物質的条件が古い社会の内部で孵化するまで古いものにとって代わることはないと言われていています。これは、社会主義革命に至る展望というものを、1850年前後の時点でのマルクスやエンゲルスの立場よりもずっと長期のものとして考える枠組みを両名に与えたのは間違いなし、それ自体はまったく正当な認識です。

しかし、まず第1に、これはあくまでも世界史的枠組みであって、各国別のものではないということを確認する必要があります。「国」という単位それ自体が人為的で歴史的なものであるという点を別にしても、すべての国が個々別々に、その中で生産力が十分に発達しきるまで新しい体制に移れないと考えるのは、まったくナンセンスでしょう。世界中の国がすでに社会主義・共産主義に移っていても、どこかある一定の地域がまだ原始的な社会であるとすれば、その社会が社会主義になるまで数千年待たなければならないという意味不明なことになるでしょう。

第2に、各国別で言うならむしろ、ある特定の社会のある特定の旧体制は、その中でそれ以上生産力を発達させえないような特殊な桎梏になるということは十分にありえます。資本主義一般ではなくて、ある国の特殊な（官僚的で、絶対主義体制と絡み合った）資本主義体制が、その国におけるそれ以上の生産力の発展にとって桎梏になるということは十分にありうることです。それがまさに第1次大戦中のロシアで起こったことでした。

したがって、この『経済学批判』序言は、それ自体としては、後進国の運命に関して、何か機械的な結論を確定的に与えるものではないことは明らかです。とはいえ、それは後進国における社会主義の展望に関して明らかに明確な限界を課すものであるのは間違いありません。この点は、次の講座においてより切実な問題になるでしょう。

### 『資本論』初版序文

次に、これまた段階革命論者にとっての聖典となっているマルクス『資本論』初版序文の有名な一節を確認しておきましょう。これは後に、ロシアの社会主義者においても大いに議論の対象となったものです。

この著作で私が研究しなければならないのは、資本主義的生産様式であり、これに対応する生産関係と交易関係である。その典型的な場所は、今日までのところでは、イギリスである。これこそは、

イギリスが私の理論的展開の主要な例解として役立つこと理由なのである。とはいえ、イギリスの工業労働者や農業労働者の状態を見てドイツの読者がパリサイ人のように顔をしかめたり、あるいは、ドイツではまだまだそんなに悪い状態にはなっていないということで楽天的に安心したりするとすれば、私は彼に向かって叫ばずにはいられない、ひとごとではないのだぞ！

資本主義的生産の自然法則から生ずる社会的な敵対関係の発展度の高低が、それ自体として問題になるのではない。この法則そのもの、鉄の必然性をもって作用し自分を貫くこの傾向、これが問題なのである。産業の発展のより高い国は、発展のより低い国にただその国自身の未来の姿を示しているだけである。(23-1:9)

「産業のより高い国は、産業のより低い国にその国自身の未来の姿を示しているだけ」であるという最後の一節は、それだけを取り出してみれば、各国はただ最も先進的な国(当時においてはイギリス)の歴史をただ遅れて繰り返すだけであると言っているように読めます。しかし、よく考えれば、マルクスがそんな馬鹿なことを言うわけがないのは、ヨーロッパの歴史というものを少しでも振り返ればわかることです。1789～93年のフランス革命はすでに、イギリスの17世紀のブルジョア革命とはまったく違うものでしたし、その後の経過も結果もまったく違うものでした。ドイツ革命はなおさらです。どこにおいても、イギリス資本主義の歴史を単純に繰り返した国など一つも存在せず、そんなことは歴史というものの複雑さを考えればあまりにも当然のことです。

そもそも、この「産業の発展のより高い国は」云々という一文がどういう文脈で語られているのかをよく理解する必要があります。その前段でマルクスは、「イギリスの工業労働者や農業労働者の状態を見て顔をしかめたり」、「ドイツではまだまだそんなに悪い状態にはなっていない」と思って安心しているドイツの読者に向かって、「ひとごとではないのだぞ」という文脈で言っているのです。つまり、資本主義工場における労働者の状態という非常に限定された意味において、「発展のより高い国はより低い国の未来を指し示している」と言っているにすぎないわけです。しかもその後で、マルクスはこう続けています。

資本主義的生産がわが国で完全に取り入れられているところ、たとえば本来の工場では、イギリスよりもずっと悪い状態になっている。というのは、工場法という対抗物がないからである。その他のあらゆる部面でわれわれは、他の大陸西ヨーロッパ全体と同じに、ただ資本主義的生産の発展だけによってではなく、またその発展の欠けていることによっても苦しめられている。近代的な窮迫のほかには、多くの伝来的な窮迫がわれわれにのしかかっているのであるが、この窮迫は、古風な時代遅れの生産様式が時世に合わない社会的ないし政治的な諸関係をともなう存続していることから生じているのである。われわれは、生きているものに悩まされるだけでなく、死んだものにも悩まされるのだ。(23-1:9)

つまり、ドイツでは資本主義の発達による資本主義的悲惨さと、古い生産関係、古い身分的な関係が残っていることによる悲惨さが並存し、絡み合っているということです。つまり、若きマルクスが「ヘーゲル法哲学批判序説」で言ったように、発展のより高い国とは異なる、後発国独特のより悲惨な労働者の状態が存在していると言っているわけです。この文言からしてもすでに、発展のより低い国がより高い国の歴史を単純に繰り返すものではないことがわかります。にもかかわらず前後の文脈を無視して、例の一文だけを抜き出して、マルクスは単純な段階発展論になったのだというのは、まったく愚かしい勘違いであると言えます。

この時期のマルクスが、直線Ⅰの線上にあったとしても、その低い位置ではなく、より高い位置にあり、したがって直線Ⅱにかなり傾いています。そのことを示すものとして、これも有名な一文ですが、マルクスが1856年4月にエンゲルスに宛てた手紙の一節があります。マルクスは、今後起こりうるドイツ革命に関して、「ドイツの全事態は、プロレタリア革命を農民戦争の再版ともいえるべきもので支持できるかどうかにかかるとであろう。そうなれば事態はずばらしいものになる」(29:39)と述べています。これは、後進国におけるプロレタリア革命と農民との関係を示したものとして、後にレーニンやトロツキーにとっても指針となったものですが、この文言から明らかなように、農民戦争という近代ブルジョア民主主義革命に特徴的な運動の「再版」が、近代ブルジョア社会を清算するプロレタリア革命と有機的に結合する事態を想定しているわけですから、これはどう見ても単純な段階革命論の立場ではないことは明らかです。

## 7、晩年のマルクスとエンゲルスにおけるドイツ革命論

では最後に、マルクスとエンゲルスの晩年におけるドイツ革命論はどのようなものだったでしょうか？ 時間がもうあまりありませんので、やや急ぎ足で紹介しましょう。

### イギリス労働運動の保守化とドイツ労働運動の飛躍

まず、この間に起こった重要なこととして、イギリス労働運動の保守化とドイツ労働運動の発展があります。1848年～50年前半のころは、イギリス労働運動が一番発展しており、ドイツはまったく遅れていました。これは資本主義の発達度合いと労働運動の発達の度合いとがある程度まで比例関係にあることを示しています。ところがその後の20年間で、イギリスの資本主義がどんどん発達しましたが、労働運動もどんどん革命的になったかという、そうではなくむしろどんどん保守化し、戦闘性を失っていきました。労働者の独自政党はいつまで経っても形成されず、革命党派はなおさらでした。

それに対してドイツではどうだったのでしょうか？ ドイツの資本主義は、1848年革命後に急速に発展し、とくにドイツがプロイセンのヘゲモニー下で統一されて以降、イギリスよりも急速に発展したとはいえ、全体としての発展水準はイギリスやフランスの資本主義よりもまだかなり遅れていました。しかし、ドイツの労働運動はイギリスよりもはるかに戦闘的になり、イギリスよりも組織化されるようになり、独自の政治的綱領さえ持つようになりました。これにはもちろん、マルクス・エンゲルスの理論的影響があったわけですが、それだけでなく、生前さんざんマルクスとエンゲルスにこき下ろされていたラサールの尽力もあります。マルクスとエンゲルスしか読まない日本のマルクス主義者はラサールの貢献を軽視しがちですが、ローザ・ルクセンブルクもトロツキーもラサールを高く評価していたことからわかるように、ドイツ労働運動の飛躍にとって、組織者ラサールが果たした役割は非常に大きなものでした。そして、こうしたことを背景に、ドイツでは、ヨーロッパのどの発達した資本主義国よりも早く独立した階級的労働者政党（少数の陰謀的革命党派ではなくて）がついに形成され、それが議会でも一定の勢力を持つまでになり、選挙ごとに得票と議席を伸ばすようになります。そのために、社会主義者取締法が制定されますが、それをもものともせず、労働者政党と労働運動は年々発展を遂げていくのです。革命的実践にかけてはヨーロッパのどの国よりも進んでいたはずのフランスよりも、ドイツの方がその面では先進的になったわけです。ドイツの資本主義もブルジョアジーもイギリスやフランスを追い抜いていないが、ドイツの労働者階級の運動はイギリスをあっさり追い抜き、フランスさえも追い抜いたのです。エンゲルスが『ドイツにおける革命と反革命』で予想した、ドイツではブルジョアジーが支配権を握るまで労働者階級の独立した運動は始まらないという認識は完全に覆されたのです。

そこで、この新しい事態をいったいどう見るのかが問題になります。「ドイツにおける資本主義の発達が遅れているから、労働者の発達も遅れている」という『革命と反革命』での議論ではまったく説明がつきません。ここにおいてマルクスとエンゲルスは、再び直線ⅠからⅡの方への移動を開始します。ドイツの資本主義はイギリスやフランスよりも遅れているにもかかわらず、ドイツの労働者は進んでいるという現実を踏まえて、両名は、かつての議論をひっくり返して、ドイツの資本主義はイギリスやフランスよりも遅れているから（あるいは遅れて発達したから）、ドイツの労働者は進んでいる、という議論へと飛躍するのです。

### 1878年のマルクスのインタビュー

その一例は、マルクスとしては珍しいあるインタビューの記録に見ることができます。あまり取り上げられないことのない「現代社会主義の創始者とのインタビュー」（1878年12月18日）という記録の中で、マルクスは次のように述べています。

今日の社会民主党は遅れて成立したものだ。ドイツの社会主義者はフランスやイギリスでいくらか意味のあったユートピア的体系に時間をかけなかった。ドイツ人は他の諸民族よりも理論的に考える傾向が強い。そして彼らは〔他国の〕以前の諸経験から実践的結論を引き出した。忘れていけないのは、ドイツにとっては、他の諸国とは反対に、現代の資本主義はまったく新しいものだということがある。現代の資本主義は、フランスやイギリスではもうほとんど忘れられてしまった諸問題を日程にのぼせた。これらの国々の人民が従属していた新興の政治勢力は、ドイツでは、すでに社会主義理論が浸透していた労働者階級に敵対した。それゆえ労働者は、現代の産業体制の導入とほとんど同時に独立の政党を結成することができた。彼らは自分たちの代表を議会のなかに持った。政府の政策に立ち向かう反対政党がひとつもないので、この役割は労働者党の手に帰した。……ドイツのブルジョア

ジーは、アメリカやイギリスのブルジョアジーとは反対に、とてつもない卑怯者から成り立っているが、もしそうでなかったら、彼らはとっくに政府への反対政策を進めなければならなかったろう。  
(34 : 424-425)

後進国であり後発国であった当時のドイツの特殊性がここでは取り上げられています。ドイツの社会主義運動は遅れて成立したため、フランスやイギリスで支配的であった種々の宗派的・ユートピア的思想にかぶれておらず、最初から（後にそう言われる）科学的社会主義の理論を受け入れやすかった。そして、何よりも、遅れて発達したドイツのブルジョア諸政党は絶対主義的君主制に政治的に従属していたため、この政府の「政策に立ち向かう反対政党」は「労働者党」しかないという状況が生まれた、というのです。ちなみにフランスでは、さまざまなブルジョア民主主義政党、共和主義政党が野党として存在していて、労働者層をも一定獲得し、それゆえフランスの労働者の政治運動はこれらのブルジョア的野党と競合する関係にありました。そこでは共和派と王党派とが主要な対立軸をなし、そのため、なかなか大衆的な労働者政党が成立しなかったし、議会で食い込めませんでした。イギリスではトーリーとウィッグというブルジョア的な対立軸が存在し、労働者階級はブルジョア政党のどちらかに投票するという伝統が存在していました。それに対して、ドイツでは、ブルジョアジーが「とてつもない卑怯者からなっている」ために、絶対主義的君主制にきっぱりと反対する民主主義的・共和主義的勢力は、社会主義的意識を持った労働者政党しか存在していなかったため、労働者政党は、ブルジョア民主主義的要求をも体现することができ、急速に発展することができたというわけです。

これはまさにドイツにおける不均等複合的発展の法則の現われであって、マルクスはそれを具体的に分析してみせたわけです。そしてこれもまた、何らかのアプリオリな理論から演繹されたのではなく、また、革命的熱狂の中で現実から先走って書かれたものでもなく、反動期にもかかわらずドイツにおいて実際に労働者政党が成立し、得票と議席を着実に獲得していった現実裏打ちされたものでした。

そしてここで気をつけるべきは、この事実はけっして、1850年代初めに、マルクスやエンゲルスが「ドイツにおける革命と反革命」で「主人も主人なら下男も下男」と書いたことの、あの時点での正しさを否定するものではけっしてないということです。あの時点ではまさに、資本主義はあまりにも発達しておらず、したがって労働者階級はあまりにも古い職人的・手工業的で、人数も少なく、広範に細分化された状態にあったわけですから、一定の資本主義の発達というものなしに、ドイツにおける労働者運動の発達もなかったわけです。しかし、労働者運動の発達、社会主義思想の発達は、資本主義の一定の発達を前提するとはいえ、両者のあいだはけっして単純な比例関係ではなく、そこには一国の水準を超えた国際的な不均等複合発展の作用を受けた独特の状況の組み合わせをもたらすのであり、資本主義の経済的発達と労働者の政治的発達との間の不均衡を生み出しうるということなのです。

### 1880年代のエンゲルスの一連の手紙

以上の観点はもちろん、エンゲルスにも共有されていました。たとえば、エンゲルスは、すでにマルクス死後の時期である1884年11月8日にカウツキーに宛てた手紙の中で、ドイツにおける労働者運動の前進がドイツの資本主義の遅れにあることを指摘しています。

歴史上はじめて、がっちりと結束した労働者党が現実の政治勢力として立ちあらわれている。このうえない苛酷な迫害のもとで発展し、成長をとげて、たえず次々と陣地を攻略しつつ、ヨーロッパで最も俗物的な国にあってあらゆる俗物根性から解放され、ヨーロッパで最も戦勝に酔いしれた国にあってあらゆる排外主義から解放された労働者党が。……奇妙なことである。われわれの前進を最も助けているのは、他ならぬドイツの工業の遅れた状態なのだ。(36 : 208-209)

この後に続けてエンゲルスは、どういう意味で「ドイツの工業の遅れた状態がわれわれの前進を助けている」のかの具体的な分析を、イギリスやフランスと対比させて行なっています。それは非常に興味深いものなので、少し長くなりますが、引用しておきましょう。

イギリスとフランスでは、大工業への移行はあらかしめ完了している。プロレタリアートが置かれている諸関係は、すでに安定したものとなっている。農業地区と工業地区、大工業と家内工業は互いに分離されて、およそ近代工業が許す範囲で固定化されている。10年ごとの周期的恐慌にとまらぬ変

動さえも、習慣的な生存条件となっている。産業革命期に成立した政治運動や直接に社会主義的な運動——まだ未熟ではあったが——は挫折して、士気の高揚よりもむしろその沮喪をあとに残した。つまり、ブルジョア的、資本主義的発展のほうが革命的な抵抗よりも強力であることが実証されたのだ。……

これに反して、ドイツでは、大工業はようやく 1848 年に始まり、その年の最大の遺産である。産業革命は今なお進行中であり、それもきわめて不利な諸条件のもとで進行している。自由な、または賃借した小土地保有に支えられた家内工業が、なおひきつづき機械や蒸気力とたたかっている。没落してゆく小農民は、最後の拠り所として家内工業に頼っている。しかし、工業的になるかならないかに、はやくも小農民は、またもや蒸気力と機械に押しつぶされる。農業からの副収入、手作りのジャガイモは、資本家にとって賃金引下げの最も強力な手段となる。今や資本家は、世界市場で競争能力を維持する唯一の手段として、正常な剰余価値の全部を外国の顧客に進呈することができ、そして彼の全利潤を正常な労賃からの控除によって作り出す。それと並んで、工業中心地では、力強く前進する大工業によってすべての生活関係が直接に変革されている。こうして、全ドイツが——たぶん、ユンカー化された北東部を例外として——社会的革命のなかに引きずりこまれ、小農民は工業に引き入れられ、最も家父長制的な地区さえも運動のなかに投げこまれ、こうして、イギリスやフランスよりもはるかに根本的に変革される。だが、結局は小農民や手工業者の収奪に終わるこのような社会的革命がおこなわれている時期は、ちょうどドイツ人、マルクスが、イギリスやフランスの実践的および理論的な発展史の結果を理論的に加工し、資本主義的生産の全本性を、したがってまたその歴史的な終局の運命を明らかにし、こうしてまたドイツのプロレタリアートに、その先輩であるイギリス人やフランス人がかつて持ったことのないような綱領を与えることができたその時期にあたっている。一方におけるいっそう根本的な社会の変革、他方における頭脳のいっそうの明晰さ——これが、ドイツの労働運動の抑えがたい進歩の秘密なのだ。(36 : 209-210)

つまり、遅れて資本主義世界市場に参入し産業革命を開始したドイツにおいては、一方では、遅れた農村や手工業部門においてはようやくその近代化を開始し、したがってこの近代化に伴うあらゆる悲惨さや社会的激変を生み出しつつあるのに、他方で、遅れて世界市場に参入したために、都市の大工業では労働者に対して過剰搾取をすることで世界市場で先進国と競争しようとしている。つまり、資本主義への移行に伴う悲惨さと資本主義のもとでの悲惨さとが、後発国ゆえに先進国よりも倍化された形で労働者とすべての勤労階層にのしかかっている。その一方で、すでにイギリスやフランスでは資本主義が十分に発達していて、その現実を理論的に総括して資本主義の運命を理論的に解明した最も先進的なマルクスの理論がこの運動に与えられている。このように、後進的なものと先進的なものとの独特の複合がドイツの社会主義運動にプラスになったのだとエンゲルスは言っています。

さらにこれに加えると、マルクスのインタビューでも少し言われているように、先発国であったイギリスやフランスでは、土着の空想的な社会主義思想が労働者階級の中で支配的であったのに対して、ドイツではそのようなものはほとんどなく（ラサール主義はあったとはいえ、これは最初からマルクス主義に親和的だった）、まっすぐにマルクスの思想が労働者階級の中で支配的となることを可能としました。

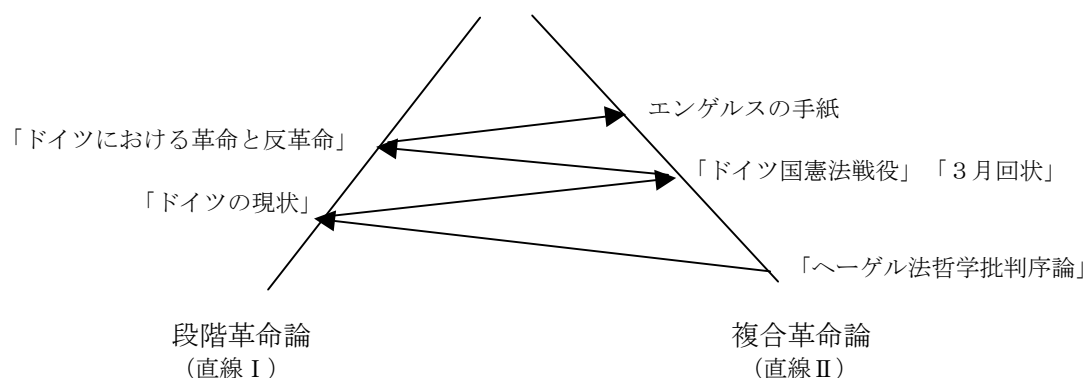
さらにエンゲルスは、1883 年 8 月 30 日のベーベルへの手紙の中で、ドイツ・ブルジョアジーの惨めさと対比して、ドイツ労働者階級の大胆さと不屈さを指摘しています。

ハンブルクの選挙は国外にも大きなセンセーションを巻き起こしている。わが同志たちの態度はまさに立派というほかない。ドイツの現実の大小さまじな惨めさとの闘いに彼らが示したあの不屈さ、忍耐、柔軟性、機転、それに勝利を信じて疑わないあの明るさ、これはドイツ近代史にもその例を見ないものだ。ドイツ社会の他のすべての階級に見られる腐敗、弛緩、全般的墮落の傾向に対比する時、それはまさに特筆すべき現象だと言える。彼らが支配に対する無能ぶりをさらけ出せば出すほどに、ドイツのプロレタリアートの支配者としての適格性、古いガラクタのいっさいを変革するその能力が、ますます光彩を放つというものだ。(36 : 51)

つまり、「主人も主人なら下男も下男」ではなく、主人と下男とが正反対の特質を有していること、そして、この下男（プロレタリアート）はブルジョアジーと違って「支配者としての適格性、古いガラクタのいっさいを変革するその能力」を示しているのだと指摘しています。では、このことからどのようなドイツ革命の展望が導き出されるのでしょうか？ エンゲルスは、1883 年 8 月 27 日のベルンシュタインへの手紙の中で、次のように述べています。

われわれのもとでは、革命の最初の直接的成果は、形式からすれば、同じくブルジョア共和制以外のものではありえないし、またそうあらざるをえない。けれども、幸いなことに、われわれの国には純粋に共和主義的なブルジョア党は存在しないから、ここではブルジョア共和制は短期的な移行期にすぎない。おそらく進歩党を先頭とするブルジョア共和制は、われわれにとって何よりも労働者大衆を革命的社会主義の側につけるのに役立つだろう。それは、1、2年のうちには清算され、われわれ以外になお存在しうるすべての中間諸政党は完全に消耗して、自滅の道をたどるだろう。そのとき初めてわれわれの番がやってきて、成功を収めることができるのだ。(36:49)

この引用文の冒頭でエンゲルスは、「われわれのもとでは、革命の最初の直接的成果は、形式からすれば、同じくブルジョア共和制以外のものではありえないし、またそうあらざるをえない」と段階革命的なことを言っていますが、しかし、すぐそれに続けて、「われわれの国には純粋に共和主義的なブルジョア党は存在しない」ということから、このような最初のブルジョア共和制的局面が長期にわたって続くのではなく、ただちに労働者による革命的体制に道を譲るだろうと述べています。この中間体制はわずか「1、2年のうちに清算され」と言っているのですから、これは明らかに、1850年初頭の認識の延長上にあるものであって、したがって再び直線Ⅱにまで至っていると言うことができます。この点を例の2本線で図式化しておく、以下のようになります。



### エンゲルスの「上からの革命」論

最後に、少し本筋から外れるかもしれませんが、実は本筋の議論と深いところで結びついている、晩年のエンゲルスの「上からの革命論」について簡単に見ておきます。

たしかに1848年革命は挫折しました。ブルジョアジーが政治的に共和主義の大義を裏切って、絶対君主制に屈服したからです。しかし、それで社会の発展が止まったかという、実はそうではなくて、たとえばドイツでは、絶対君主制のもとでビスマルクが首相になって、上からの工業化が推進され、ドイツ資本主義は未曾有の発展を遂げ、それと同時に、かつては数十の諸邦に分かれていたドイツが一連の戦争と併合を経てプロイセンの軍事的・政治的ヘゲモニーのもとで、統一ドイツ国家が形成されました。

つまり、1848年革命の主要な目標であった、ブルジョア的諸関係のより自由な発展と統一した民族国家の成立という課題が、旧体制のもとで上から遂行されたわけです。エンゲルスは、「ビスマルクは1848年革命の遺言執行人になった」という言い方でもってこのことを表現しました。「下からの革命」は挫折したが、革命が目標とした最も重要なことが、ビスマルクによる「上からの革命」によって成し遂げられたということです。その中で初めて統一したドイツ労働者階級という主体が作り出され、それに基づいた階級的団結が形成されました。しかしながら、その一方でヴィルヘルムの君主制はあいかわらず存在しつづけているわけです。ビスマルクによる「上からの革命」は、いわばブルジョアジーが権力を取ることなく、ブルジョア革命のいくつかの主要な課題を実行したことになります(ただし、東エルベのユンカー支配などの半封建的条件はもちろん清算されていません)。

同じような過程は、ビスマルク統治下のドイツほど明確なものでないにせよ、他のヨーロッパ諸国でも進行し、たとえばイタリアでは下からの革命運動が敗北した後にイタリアの統一が上からしだいに実現されていきます。後にこれは「革命なき革命」として、すなわち「受動的革命」として概念化され、獄中のグラムシが詳しい分析をするテーマの一つとなります。

このような「上からの革命」ないし「受動的革命」の過程は、いわば下からの革命のダイナミズムを表現する「永続革命」のネガです。永続革命は、ブルジョア民主主義革命の遂行という歴史的課題が、ブルジョアジーよりも進歩的で戦闘的な下層階級によって担われた時に生じる前方への強力な発

展力学を表現していますが、「上からの革命」ないし「受動的革命」は、ブルジョア民主主義革命の遂行という歴史的課題が逆にブルジョアジーよりも保守的な階級ないし階層によって担われた時に起こる抑制された発展力学を表現しています。そして、この「上からの革命」ないし「受動的革命」が生じたことで、ヨーロッパ諸国の多くでは、ブルジョアジーが権力をとらなくても、ブルジョアの課題がおおむね達成されるという事態になったのです。

イギリスやフランスなどの西欧先発国では、ブルジョアジーないし小ブルジョアジーがブルジョア民主主義革命の遂行という歴史的課題を担い、したがって典型的なブルジョア民主主義革命が起こりました。しかし、遅れて資本主義に参入したドイツやイタリアなどの中欧・南欧諸国では、先発国のイギリスやフランスにおいてほどブルジョアジーは大胆でも先進的でもなかったが、永続革命の過程を担えるほど労働者階級は発達していませんでした。この中間的状况ゆえに、そこでは、より保守的な階級ないし階層が「上からの革命」ないし「受動的革命」を遂行するという事態が生じました。では、それよりもさらに遅れて資本主義に参入する国ではどうなるのか？ それこそがまさにロシア革命において問われた根本問題でした。